Records and Evaluation of Japanese Art:
Trajectory of Art History Research Viewed through Scholars' Notebooks

Thematic Exhibition 特集

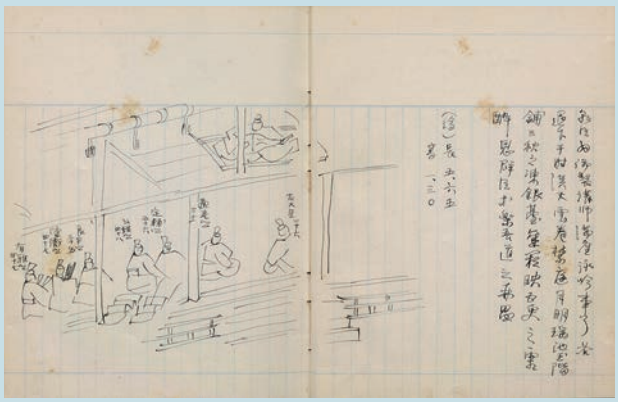
日本美術の記録と評価

調査ノートにみる美術史研究のあゆみ

令和2年(2020)
7月14日(火)
▼
8月23日(日)
東京国立博物館
本館14室

中殿御会図(模本)　狩野(晴川院)養信模　江戸時代・19世紀　東京国立博物館　Cultural Ceremony Held at the Imperial Palace (Copy)　Copied by Kanō (Seisen'in) Osanobu

中殿御会とは建保6年(1218)に宮中清涼殿でおこなわれた和歌会と管弦の集いです。その様子を参加者で歌人、似絵を得意とした藤原信実が絵巻に描いたと伝えられますが、原本は失われています。上図は鎌倉時代の模本を、木挽町狩野家の晴川院養信が模写したもので、右図は大正15年(1926)の調査記録です。



中殿御会図　調査ノート　田中一松記　東京文化財研究所　Research Notebook by Tanaka Ichimatsu

博物館には数多くの美術作品が収蔵・展示されています。しかし時を経て、いつ、どこで、誰が作ったのか、わからなくなってしまった作品は少なくありません。また、こうしたことを探究する美術史も、日本では明治時代に入ってから学問として研究がおこなわれるようになりました。この特集では、美術作品がどのように調査研究され、美術史研究が形作られてきたのかを、研究者の調査ノートと実際の作品によってご紹介します。

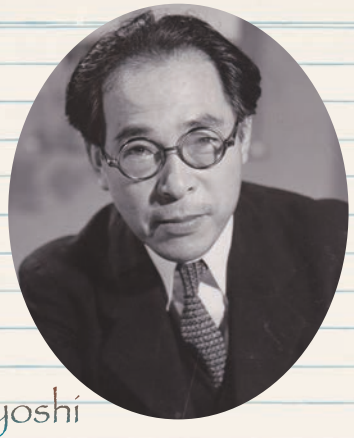
明治から昭和の先人たちは実際の作品をじっくりと見て、調査ノートに時代や作者、材質や技法といった基本的な情報を記録し、図様を写し、作品の特徴を文字と絵を交えて書き留めました。観察・調査にもとづき、時代や作者など不明な点について検討し評価に至る、という行為を連綿と重ねてきたのです。東京文化財研究所や京都工芸繊維大学が所蔵する調査ノートから、目で見て、手で書き写すことからつづられた、日本の美術史研究の確かなあゆみを追体験してみてください。そこに記された内容は作品をより深く理解する手がかりともなります。調査ノートを通して、作品を見る大切さと楽しさを感じていただけたら幸いです。

This thematic exhibition sheds light on the trajectory of art history research in Japan. It aims to unveil how well-recognized Japanese artworks were studied between the Meiji and Shōwa eras, from the latter half of the 19th century to the end of the 20th century, through notebooks that scholars used to record their research findings, along with some actual artworks. Based on their research, the scholars theorized about unknown details of viewed artworks, such as the artists and the dates of creation, and evaluated their own hypotheses. Through the records kept by these scholars in their notebooks, visitors are invited to re-appreciate the importance and enjoyment of looking closely at artworks.

田中一松　調査ノート
東京文化財研究所
Research Notebooks by Tanaka Ichimatsu

狩野山楽筆 繋馬図絵馬　調査ノート
土居次義記　京都工芸繊維大学附属図書館
Research Notebook by Doi Tsugiyoshi

土居次義（1906～1991）



大阪市に生まれる。第三高等学校から京都帝国大学（現、京都大学）文学部哲学科美学美術史へ進学、昭和10年（1935）より恩賜京都博物館（現、京都国立博物館）鑑査員として勤める。昭和21年（1946）同館館長。昭和24～45年（1949～70）京都工芸繊維大学教授。障壁画研究を中心に、近世の諸画家について多数の論考を発表。

Doi Tsugiyoshi

農夫図屏風
渡辺始興筆　江戸時代・18世紀
東京国立博物館
A Peasant with an Ox
By Watanabe Shikō

渡辺始興筆 農夫図屏風　調査ノート　土居次義記　京都工芸繊維大学附属図書館　Research Notebook by Doi Tsugiyoshi

渡辺始興について土居は「江戸中期の障壁画家として一流」と評しました。同じく始興が描いた農夫図と伝えられる、京都・大覚寺の杉戸絵や、アメリカのボストン美術館所蔵の屏風と比較できるよう、人物の姿態や衣装、持物の特徴をスケッチと文字で記録しています。

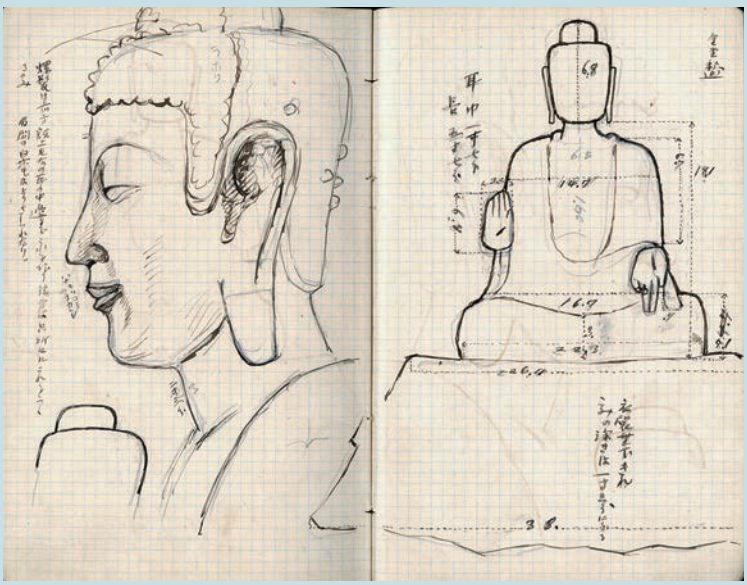
今泉雄作（1850～1931）

幕府の町奉行役人の子として江戸・八丁堀に生まれる。文部省や東京美術学校（現、東京藝術大学）、東京帝室博物館（現、東京国立博物館）に勤務し、岡倉天心とともに近代日本の美術行政を支えた。自筆の日記である『記事珠』は明治20年（1887）から大正2年（1913）にかけての鑑定や調査の記録がつづられたもので、38冊に及ぶ。

Imaizumi Yūsaku

尾形光琳筆 伊勢物語図　調査ノート
今泉雄作記　東京文化財研究所
Research Notebook by Imaizumi Yūsaku

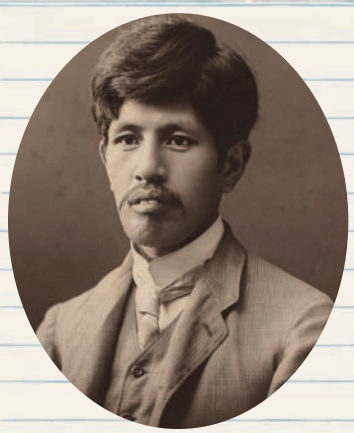
参考　**伊勢物語八橋図**
尾形光琳筆　江戸時代・18世紀
東京国立博物館
A Scene from The Tales of Ise
By Ogata Kōrin



法隆寺釈迦如来像　調査ノート　平子鐸嶺記　東京文化財研究所
Research Notebook by Hirako Takurei

平子鐸嶺（1877～1911）

三重県津市に生まれる。本名尚、鐸嶺は号。東京美術学校日本画科および洋画科を卒業したのち、明治36年（1903）より東京帝室博物館に勤務し、日本美術の調査研究に従事した。法隆寺非再建論を提唱するなど当時の仏教美術研究の第一線で活躍したが、肺を患い35歳で逝去した。



Hirako Takurei

田中一松（1895～1983）

山形県鶴岡市に生まれる。東京帝国大学（現、東京大学）文学部美術史学科卒業後、大正13年（1924）より東京帝室博物館に勤務し、以後、半世紀以上にわたり文化財行政の中枢を担う。昭和28～40年（1953～65）に東京国立文化財研究所（現、東京文化財研究所）所長を務める。特に仏画・絵巻物・水墨画についての著作が多い。

Tanaka Ichimatsu

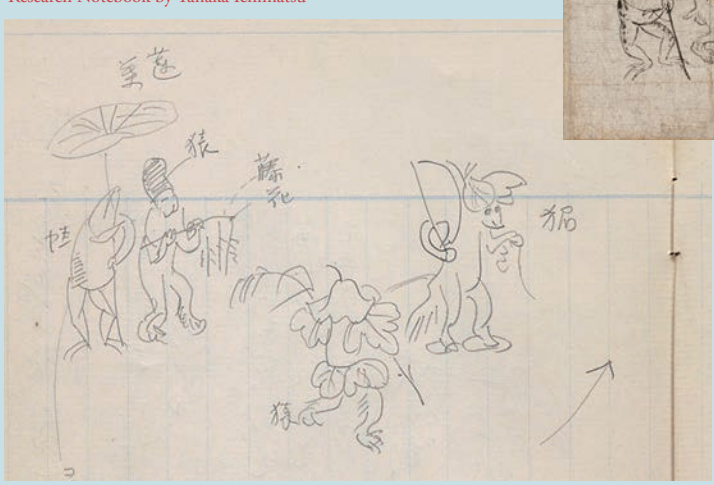
岳翁蔵丘筆 山水図　調査ノート
田中一松記　東京文化財研究所
Research Notebook by Tanaka Ichimatsu

参考　**◎山水図**　岳翁蔵丘筆
室町時代・15世紀　東京国立博物館
◎Landscape　By Gakuō Zōkyū

展示作品リスト

No.	名　称	作　者	時　代	所 蔵 者
1	年中行事絵巻　調査ノート	今泉雄作記	明治20年（1887）	東京文化財研究所
2	法隆寺釈迦如来像　調査ノート	平子鐸嶺記	明治30～40年（1897～1907）	東京文化財研究所
3	鳥獣戯画　調査ノート	田中一松記	大正14年（1925）	東京文化財研究所
4	狩野山楽筆 繋馬図絵馬　調査ノート	土居次義記	昭和16年（1941）	京都工芸繊維大学附属図書館
5	尾形光琳筆 伊勢物語図　調査ノート	今泉雄作記	明治21年（1888）	東京文化財研究所
6	刺繍釈迦如来説法図　調査ノート	平子鐸嶺記	明治30～40年（1897～1907）	東京文化財研究所
7	虚空蔵菩薩像　調査ノート	田中一松記	昭和5年（1930）	東京文化財研究所
8	聖衆来迎寺障壁画　調査ノート	土居次義記	昭和17年（1942）	京都工芸繊維大学附属図書館
9	中殿御会図　調査ノート	田中一松記	大正15年（1926）	東京文化財研究所
10	中殿御会図模写	田中一松記	大正15年（1926）	東京文化財研究所
11	中殿御会図（模本）	狩野（晴川院）養信模	江戸時代・19世紀	東京国立博物館
12	玉畹梵芳筆 蘭蕙同芳図　調査ノート	田中一松記	昭和18年（1943）	東京文化財研究所
13	周文筆 山水図　調査ノート	田中一松記	大正15年（1926）	東京文化財研究所
14	岳翁蔵丘筆 山水図　調査ノート	田中一松記	昭和2年（1927）	東京文化財研究所
15	狩野山楽筆 車争図　調査ノート	田中一松記	昭和3年（1928）	東京文化財研究所
16	『帝鑑図説』模写	土居次義記	昭和8年（1933）頃	京都工芸繊維大学附属図書館
17	狩野山楽筆 山水図屏風　調査ノート	土居次義記	昭和12年（1937）	京都工芸繊維大学附属図書館
18	虎の足の描写比較　研究ノート	土居次義記	昭和9年（1934）頃	京都工芸繊維大学附属図書館
19	竹虎図　調査ノート	土居次義記	昭和23年（1948）	京都工芸繊維大学附属図書館
20	農夫図屏風	渡辺始興筆	江戸時代・18世紀	東京国立博物館
21	渡辺始興筆 農夫図屏風　調査ノート	土居次義記	昭和47年（1972）	京都工芸繊維大学附属図書館

鳥獣戯画　調査ノート（部分）
田中一松記　東京文化財研究所
Research Notebook by Tanaka Ichimatsu



参考　◎**鳥獣戯画断簡**
平安時代・12世紀　東京国立博物館
◎ Detached Segment of Frolicking Animals (known in Japanese as *Chōjū Giga*)

東京国立博物館が所蔵する鳥獣戯画断簡の田中一松による調書。寸法、紙継の状態、図様などが記されています。現在の京都・高山寺所蔵の鳥獣戯画甲本のように紙継に高山寺の印が捺されていないことから、田中は捺印される以前に切られたものであろう、と推測しています。

・◎：重要文化財／Important Cultural Property
・本特集は、JSPS科研費JP19H01217「日本美術の記録と評価について の研究――美術作品調書の保存活用」の成果の一部です。

東京文化財研究所のサイトで、Web展覧会も開催中です。
展示ページの続き、調書の書き下し文などもご覧いただけます。
URL　https://www.tobunken.go.jp/exhibition/202007/

TNM
特集　日本美術の記録と評価――調査ノートにみる美術研究のあゆみ――
令和2年7月14日発行
執筆：江村知子（東京文化財研究所）、並木誠士（京都工芸繊維大学）、多田羅多起子（京都芸術大学）／翻訳：君波妙子（東京国立博物館）
デザイン・制作・印刷：精興社／編集：東京文化財研究所、東京国立博物館／発行：東京文化財研究所
©2020 Independent Administrative Institution National Institutes for Cultural Heritage Tokyo National Research Institute for Cultural Properties, and Tokyo National Museum